

アカデミック・マーケットの 使用言語

英語による海外発信をめぐる議論が日本の社会科学で盛んである。私が所属する社会学会でも、国際化の名の下にそうした議論が盛んにされている。英語使用は、単に言葉だけではなく、出版文化、研究者のネットワークなど言語に伴う一連のパッケージを含むので、その波及効果は計り知れず、その重要性については言うまでもない。ここではむしろ言語使用と国際性のもう一つの側面について個人的な体験談を語ってみたい。

学術言語をめぐる私の個人史は、普通とは逆かもしれない。最初の著書が英語で、イギリスのラウトレッジから一九九二年に『現代日本の文化ナショナリズム』を出版した。そのとき私は上智大学に勤めていて、講義も英語が多く、日本語で書く必要性を感じていなかった。これから英語のみで研究発表していこうと思っていた。実際、英語の著書に対する反響は翌年から始め、世界各地からの講演や執筆の依頼を受けて、しばらくは英語の学術世界に身を置いていた。そんな中、一九九六年に東大の文学部に移り、環境が変わった。ある時主任教授に研究室と呼ばれて、「吉野君、君は東大に来たからには、日本語で本を書かなければいけない。日本の社会学者にもっと知られるようになりなさい」と言われた。その助言に半ば従う形で、一九九七年に英語の本を日本語でかなり書き直したものを『文化ナショナリズムの社会学』として名古屋大学出版会から出版した。

その結果いくつかの貴重な体験をすることになった。第一に、あたりまえのことかもしれないが、日本での認知度が高まった。そして、第二に、これは予期せぬことだったが、中国と韓国でも注目されるようになった。中国語と韓国語に翻訳されたからである。もし日本語で書かなかったら、こういうことは起こらなかったように思う。これは、もしかしたら日本の学術界にとつて無視できないもう一つの国際発信の場なのかもしれないと感じた。

日本と同様に、中国と韓国には翻訳文化とそれを取り巻く研究者のネットワークがある。誰が何語で翻訳するかという役割分担があつて、歴史的に蓄積がある日本留学組の存在も大きい。日本の著作を中国語なり韓国語に翻訳することは、彼らにとつて一つの業績になるし、それを支える出版文化がある。日本語の社会科学の研究を翻訳して読者を拡げてくれる人たちが中国や韓国にいるということ、これは大切にしたいと思つた。

日本で醸造されてきた「日本の」社会科学、それから、それを取り巻く東アジア、特に中国、韓国から成る世界が一つあつて、もう一つには、英語を中心としたグローバル化の中で巨大化しているもう一つのアカデミック・マーケットがある。研究対象地を拡げればさらに別の市場がいくつも存在するのであろう。こうした複数の言語市場の間をバランスをとりながら行ったり来たりすることがなによりも大切だと思ふ。

よしの こうさく／上智大学教授

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスよりPh.D.取得。専門はナショナリズムの社会学。上智大学講師、助教授、東京大学助教授、教授を経て、現職。本文中で紹介した著書に加えて、編著書に*Consuming Ethnicity and Nationalism: Asian Experiences* (Curzon) などがある。マレーシアにおけるマルチエスニシティと高等教育の英語化に関する調査を長年行い、現在著書を執筆中。